

# 「奥の細道」歌仙の旅

芭蕉の「奥の細道」行は、①歌枕②謡曲の関連地③能因・西行の跡④義経の古跡等を観ることが目的であったでしょう。そのためには各地の人の協力が必要でした。芭蕉と曾良の二人三脚は「連句興行」を連続的（断続的）に行い目的を完遂しました。「連句興行」を行うことにより、基本的に150日間の衣食住が保障されたことでしょう。歌仙は、未完（3句、4句、表6句、半歌仙、二十句、二十六句等）を含め、30回以上あり、36句満尾は15回ある。また44句と50句もあり、非常に多彩な連句興行を実施している。

## 01「秣おふ」の巻

元禄二年四月四日、那須余瀨の翠桃を尋ね、芭蕉・曾良・翠桃の三人で始め、中途から桃雪他土地の俳人らによる歌仙。



鹿子畑翠桃邸跡と墓地  
辞世の歌  
きゆるとは我はおもはじ露の玉  
色こそかはれ花ともみゆ覧



秣おふ人を枝折の夏野哉  
青き覆盆子をこぼす椎の葉  
村雨に市のかりやを吹とりて  
町中を行川音の月  
箬鷹を手に居ながら夕涼  
秋草蚤がく帷子はたそ

芭蕉  
翠桃  
曾良  
芭蕉  
翠桃  
曾良

玉藻稻荷神社 栃木県大田原市

秣おふ人を枝折の夏野哉 芭蕉



二裏  
今日も又朝日を拝む石の上

芭蕉

明王寺 栃木県大田原市

五・七・五の長句と七・七の短句を繰り返していく俳諧の連歌。その解釈について「秣おふ」を例に記述してみたい。

発句

秣おふ人を枝折の夏野哉 芭蕉

この発句は、「秣おふ人」（余瀨の翠桃は黒羽藩家老の弟だから、広い放牧場を所領に持ち、それを管理していたのであろう。）に案内してもらって、雲岩寺、犬追物の跡、玉藻前の古墳、金丸八幡宮など黒羽の名所を見て回ったことに、労いをこめての挨拶になる。

枝折は道が分かるように枝を折って置いて行く道しるべで、秣おふ人の枝折があればこそ、この夏野を楽しく見て回ることができました、というような意味になる。

脇

秣おふ人を枝折の夏野哉

青き覆盆子をこぼす椎の葉 翠桃

（秣おふ人を枝折の夏野哉青き覆盆子をこぼす椎の葉）

秣おふ人の案内で過ごす夏野だろうか、どうりで椎の葉からは青いイチゴがこぼれている。「青き覆盆子」には、芭蕉さんをご案内するのは青いイチゴのような未熟者です、という謙虚な気持ちも込められている。

「枝折」なんて、別に意図したわけではなく、たまたま私がまだ青い木苺をこぼして歩いているだけです。

第三

青き覆盆子をこぼす椎の葉

村雨に市のかりやを吹とりて 曾良

(村雨に市のかりやを吹とりて青き覆盆子をこぼす椎の葉)

村雨が降り出したので辻で開かれる仮設の市場も店じまいして、あたかも吹き飛ばされたかのように跡形もなくなった。店をあわててたたんだ時に、椎の葉に盛っていた青いイチゴがこぼれて、人のいなくなった市場に点々と落ちている情景に転じる。

四句目

村雨に市のかりやを吹とりて

町中を行川音の月 芭蕉

(村雨に市のかりやを吹とりて町中を行川音の月)

市場が村雨のために中止になり、急遽たたまれたあと、村雨は斑(むら)に降る雨というだけあってすぐに止み、月が出る頃にはひっそり静まった町に川音だけが聞こえる。

村雨と月の取り合わせは、和歌にも多く見られる。それに「市」に「町中」と、四手にきっちりと付けている。

五句目

町中を行川音の月

箬鷹を手に居ながら夕涼 翠桃

(箬鷹を手に居ながら夕涼町中を行川音の月)

「箬鷹」はハイタカのこと。「川音」に「夕涼み」が付け合い。夕涼みの情景に「ハシタカ」を登場させることで、武将か何かの面影とし、打越の町人の風情を突き放している。

「夕涼み」は夏の季語だが、実際は秋になっても残暑が厳しければ夕涼みをしたものだ。昔は旧暦七月一日から秋だったから、今の新暦八月の夏休みは昔だったら秋といったらよかった。

六句目

箬鷹を手に居ながら夕涼

秋草爰がく帷子はたそ 曾良

(箬鷹を手に居ながら夕涼秋草爰がく帷子はたそ)

帷子も一重の衣で本来は夏のもの。「夕涼み」には付き物。帷子の柄を「秋草」として、強引に秋にもって行く。

ハシタカを手に乗せながら夕涼みして、秋の草をあしらった帷子を着こなす粋なお人はだーれ?といったところか。

02「風流の」の巻

元禄二年四月二十三日、須賀川の楽等躬邸での三吟歌仙。



鹿子畑翠桃邸跡と墓地  
辞世の歌  
きゆるとは我はおもはじ露の玉  
色こそかはれ花ともみゆ覧

「風流」は俳諧と同義。風流(俳諧興行)の始まりは、みちのくのひなびた田植え歌の興にしましょうか。芭蕉が「奥の細道」の旅の途中、須賀川の等躬のもとを尋ねた時の発句。



風流の初めやおくの田植歌  
覆盆子を折て我まうけ草  
水せきて昼寝の石やなをすらん  
籬に鮎の聲生かす也  
一葉して月に盆なき川柳  
雇にやねふく村ぞ秋なる

芭蕉  
等躬  
曾良  
芭蕉  
等躬  
曾良

境明神玉津島神社 福島県白河市

03 「かくれ家や」の巻

元禄二年四月廿二日、須賀川、乍単斎（相楽等躬）宿、俳有。（曾良随行日記）



等躬は須賀川宿で問屋を営み駅長の要職も務める。従前からの知人。等躬邸の敷地は広く、その中に「可伸庵跡」も含まれる。等躬（相楽等躬、通称相楽伊左衛門）の墓地は長松院にある。

発句は曾良の書留に「めにたたぬ花を」と字余りになっているのが「目だたぬ花を」に直されている。「奥の細道」の頃の芭蕉は古典回帰から、それまでの天和の破調の句を改め、五七五にきちんと収める句が多くなっているが、まだ時折破調の句もあった。

桑門可伸は栗の木のもとに庵をむすべり。傳へ聞、行基井の古は、西に縁有木なりと、杖にも柱にも用ひ給ひけるとかや。幽栖心ある分野にて、弥陀の誓もいとたのもし

かくれ家や目だたぬ花をを軒の栗 芭蕉



かくれ家や目だたぬ花を軒の栗	芭蕉
まれに螢のとまる露草	栗斎
切崩す山の井の名は有ふれて	等躬
畔づたひする石の棚橋	曾良
把ねたる真柴に月の暮かかり	等雲
秋しり貞の矮屋はなれず	須竿

可伸庵跡 福島県須賀川

04 「すすしさを」の巻

元禄二年五月、尾花沢での素英、風流も加わっての五吟歌仙興行。



清風（鈴木道祐）は、尾花沢の紅花問屋で談林派の俳人、後に蕉門にはいり従前より知人。

曾良の「随行日記」によると、芭蕉と曾良が尾花沢に着いたのは五月十七日の昼過ぎで、この日「一宿ス」とある。翌日は「養泉寺移り居」とあり、翌十九日「素英、ナラ茶賞ス。」とある。このあと二十一日に「清風二宿」、二十三日に「清風二宿」とある。二十四日は大石田で「五月雨を」の興行をする。二十五日は「連衆故障有テ俳ナシ」とある。二十六日は「屋ヨリ於遊川」とあり、二十七日には尾花沢を発つ。この興行は十八日から二十三日までの間に行われたものと思われる。長い滞留でゆっくりと旅の疲れを癒したのだろう。

自分ちのように寝て暮らしてますと挨拶する。

すすしさを我やどにしてねまる哉 芭蕉



すすしさを我やどにしてねまる哉	芭蕉
つねのかやりに草の葉を焼	清風
鹿子立をのへのし水田にかけて	曾良
ゆふづきまるし二の丸の跡	素英
檜紅葉人かげみえぬ笙のおと	清風
鴉のつれくるいろいろの鳥	風流

養泉寺 山形県尾花沢市

05「おきふしの」の巻

元禄二年五月廿二日、尾花沢の素英亭での興行か。芭蕉、曾良、清風、素英による四吟歌仙興行。

尾花沢での2歌仙の一つ「おきふしの」である。芭蕉の発句「すすしさを」に続くもの、清風の発句「おきふしの麻にあらはす小家かな」ではしまる。この句碑・文学碑はなし。そもそも、曾良随行日記（廿二日晚、素英へ被り招）に2歌仙の記録もなく、長らく「存疑」として扱われていたようだ。



おきふしの麻にあらはす小家かな	清風
狗ほえかかるゆふだちの蓑	芭蕉
ゆく翹いくたび畏のにくからん	素英
石ふみかへす飛こえの月	曾良
露きよき青花摘の朝もよひ	芭蕉
火の気たえては秋をとよみぬ	清風

村川素英生前墓（逆修墓） 山形県尾花沢市

素英は芭蕉の滞在中、多忙な清風に代わって接待役を務めた地元の俳人です。上町観音堂にはその素英が生前から用意していたという墓（村川素英生前墓）があります。

おきふしの麻にあらはす小家かな 清風

麻は背が高い。二メートル六十センチくらいになる。その朝畑に囲まれていれば、麻が風で傾いたときは家が見えるが、真っすぐに戻ると見えなくなる。そんな麻に見え隠れする小家です、と挨拶する。

小家の外から見た印象をいうあたり、素英亭での興行か。曾良随行日記に「廿二日 晩、素英へ 被招。」とある。

狗ほえかかるゆふだちの蓑 芭蕉

興行は夕方行われたのであろう。夕立の中を蓑をきて会場にやってきて、その時に犬に吠えられたと、その時の状況をそのまま詠んだものと思われる。

06「さみだれを」の巻

元禄二年五月二十九日、出羽大石田、高野一榮宅で四吟歌仙を興行。



興行の行なわれた出羽国大石田の一榮（高野平右衛門）邸は、今の山形県大石田町の  
大石田駅の南、西部街道の最上川に架かる  
橋のたもと付近にあったらしい。

「奥の細道」の旅の途中、5月27日に山寺立石寺を見たあと、翌日馬で天童へ向かい、そのあと大石田の一榮邸へと向い、未の中刻（午後4時頃）に到着した。翌28日。発句、脇、第三、四句目まで終ったところで、黒滝山向川寺を参拝し、未の刻（午後3時から5時）に帰ってきて興行を再開する。興行は夜になって一度中断し、翌日に再開され、辰の刻（午前7時から9時）に終わった。天気は曇りがちで夜に雨が降った。最上川の畔にある一榮邸での発句ということで、眼前の五月雨で増水した最上川の興で、その景色が涼しげだと賞賛して、興行の挨拶としたものであろう。後に、

五月雨をあつめて早し最上川 芭蕉

と改作し、「奥の細道」の中の一句として有名になった。



さみだれをあつめてすすしもがみ川	芭蕉
岸にほたるを繋ぐ舟杭	一榮
瓜ばたけいさよふ空に影まちて	曾良
里をむかひに桑のほそみち	川水
うしのこにころなくさむゆふまぐれ	一榮
水雲重しふところの吟	芭蕉

高野一榮宅跡 山形県大石田町

ネット検索で「やまぐち連句会様」の記事を見つけました。

さみだれをあつめてすすしもがみ川

これは「奥の細道」に出てくる句で知られる「五月雨をあつめて早し最上川」の原形です。芭蕉は、弟子の曾良と共に俳諧の旅に出て、最上川のほとりの「一栄・高野平右衛門」宅で連句を巻き、その「発句＝挨拶句」で「さみだれをあつめてすすしもがみ川」と詠んだのです。元禄二年仲夏末のことでした。

人に会って「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」などと挨拶すると、相手も「どうも～」とか「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」とか言って、お互いに挨拶を交しますが、誰かのお宅にお邪魔した時はどうでしょうか？ それも、「おっす！」と「おう！」の関係ではなく、ある程度、緊張感が伴う場合や、初対面に近い状態でお邪魔する時などは、あなたならどう挨拶しますか？

連句の挨拶句は、それと同じで、質的にも堂々と独立してしっかりとした個性や思想が醸し出されるものでなくてはなりません。「脇句」もこれと同じで、そうした挨拶を受けての返事のようなものです。この「挨拶句＝発句」と「脇句」で、その座の挨拶が済み、連句の座における「一期一会」の風格も決まります。

発句をつくる際は、「時と所」を盛り込んでつくり、脇句をつくる際は、発句の句柄に密着した「同じ季節、同じ時刻、同じ場所」を補完するような感じにします。

芭蕉の時代には、発句を招かれた客が詠み、その句を受けて招いた側の主人が「脇句」を付けるのが一般的でした。芭蕉の挨拶句に一栄・高野平右衛門は、どう返事をしたかという「岸にほたるを繋ぐ舟杭」と付けています。

発句 さみだれをあつめてすすしもがみ川（芭蕉）

脇 岸にほたるを繋ぐ舟杭（一栄）

芭蕉が、「時と所」を盛り込んでつくった句に、一栄が、「同じ季節、同じ時刻、同じ場所」を補完するように句を付けたのですが、勿論、そんな基本だけで詠まれたのではないのが名人の名人たる由縁。これを私たちが、さらに読み込んで、どう解釈するかで、連句の深さや質が変わっていきます。芭蕉はただ単に、最上川的情景を詠んだだけではなく、一栄も、その情景を補完するためだけに詠んだわけではありませんが、この連句解釈は、まだ先のテーマとして置いておくことにします。

最近では、発句には「切れ字」を使うのがよろしい、という風潮があり、基本的に「や」とか「けり」とか「かな」などを用いますが、それにこだわる必要もありません。脇句の下七は「体言留め（名詞）」にするのが一般的だ、とされています。挨拶が済むと、これから歌仙の本番です。

「発句」と「脇句」が出ると、歌仙一巻の始まりです。「発句」と「脇句」を一对のものとして捉えつつ、目線を転じ、五・七・五で付けます。「発句」と「脇句」に対して、次の句は「第三」と称します。「さみだれを」の歌仙にみると、

第三 瓜ばたけいさよふ空に影まちて（曾良）

第三は「て」「に」「らん」「もなし」の留め字を用いるのが普通だとされています。第三の句を受けて、次は、テンポをつけるように軽くサラリと七・七の句を付けます。第三の次の表の「四」は「四句目＝しくめ」とも称します。

第四 里をむかひに桑のほそみち（川水）

次は表の「五」です。そこでは、月の句を詠むのが一般的です。発句が春、夏、冬の場合は、秋の月を、発句が新年の時は春の月を、五・七・五で詠みます。発句が秋の月の時は「雑（そう＝無季）の句」を詠みます。主に月を詠む場合が多いので「月の座」とも称されます。

第五 うしのこにこころなぐさむゆふまぐれ（一栄）

俳諧名人の巻く連句は、「決まりごと」の「式目」に振り回されることもなく、むしろ、それを超えたところで連々と続いていくようです。

第六 水雲重しふところの吟（芭蕉）

「表六句」に至るまでは「決まりごと」が一句一句にあるので、進行のスピードもなかなか上がりません。「決まりごと」を「式目」と称しますが、これに振り回されると「面倒くさいなあ」と感じることもあります。でも、長距離ドライブに行くのと同じで、助走の暖気運転のようなものです。言い替えれば、気分が乗るまでの、欠くことの出来ない手順でもあります。これが過ぎれば、自然と気分が乗ってきて、「式目」についても「決まりごと」があるから起承転結あるいは「序・破・急」のメリハリも出るのかな、ということにほんの少し気付きます。

座を囲むと、「表六句」が終わるまでは一服もおあずけが原則です。「表六句」に至って、しばしくつろぎのティータイムを迎えます。そして、コーヒーや紅茶、はたまた緑茶や番茶をのみ、菓子などをパクつきながら次の句へとすすんでいきます。いくら「パクつきながら」といっても、礼節は必要です。句座作法には「飲食出すも受くるも適量のこと」とあります。



名残りの裏六句

雪みぞれ師走の市の名残とて  
 煤掃の日を草庵の客  
 無人を古き懐帟にかぞへられ  
 やもめがらすのまよふ入逢  
 平包あすもこゆべき峰の花  
 田の種をいはふむらさめ

曾良  
 芭蕉  
 一栄  
 川水  
 芭蕉  
 曾良

やもめがらすのまよふ入逢 (川水)

三十五句目

平包あすもこゆべき峰の花 芭蕉

(平包あすもこゆべき峰の花やもめがらすのまよふ入逢)

「やもめがらす」を男やもめの方として、妻を失い出家した旅の僧侶としたか。僧は黒づくめなので「からす」に例えられる。簡単な風呂敷包み一つで、山桜の咲く峯を越えてゆく。行き先は吉野か高野山か。

拳句

平包あすもこゆべき峰の花

山田の種をいはふむらさめ 曾良

(平包あすもこゆべき峰の花山田の種をいはふむらさめ)

山桜の咲く頃、峯を越す道であればそこには山田があり、苗代には種蒔きも行なわれている。

しかし、これは単なる景色の句ではない。平包を持って峯を越えてゆく旅人は芭蕉のことであり、大石田という田んぼに俳諧の種は蒔かれて、それを祝福するかのように雨が降る。この興行が終る頃、折から雨が降り出したのだろうか。曾良の「随行日記」には「夜二入小雨ス」とある。

07「御尋に」の巻

元禄二年六月二日、新庄。風過より九郎兵衛へ被り招。彼是、歌仙一巻有。

曾良随行日記

二日

風過より九郎兵衛へ被り招。彼是、歌仙一巻有。盛信。息、塘夕、渋谷仁兵衛、柳風共。孤松、加藤四良兵衛。如流、今藤彦兵衛。木端、小村善衛門。風流、渋谷甚兵へ。



芭蕉句碑「水の奥」(柳の清水跡)



風流亭跡



芭蕉句碑「風の香も」(市民プラザ)



盛信亭跡

武士亂し入東西の門  
 老僧のいで小盃初んと  
 牡丹の霽風ほのか也  
 袖香爐煙は絲に立添て  
 果なき戀に長きさかやき  
 樂しみと茶をひかせたる春

良翁柳風端水流

雪ふらぬ松はをのれとふとりけり  
 萩踏しける猪のつま  
 行盡し月を燈の小社にて  
 疵洗はんと露そくくなり  
 散花の今は衣を着せ給へ  
 陽炎消る庭前の石

良翁端松翁柳

浪の音聞鳴の墓はら風  
 三夜さ見る夢に古郷のおもはれし  
 簾を揚てとをすつばくら  
 梅かざす三寸もやさしき唐瓶子  
 筆ころみて判を定る  
 すけたる父が弓矢をとり

木端如柳良流傳翁

馬市くれて駒むかへせん  
 そろ成月に二里隔けり  
 霧立かくす虹のもとすゑ  
 菊作り鍬に薄を折添て  
 はじめてかほる風の薫物  
 御尋に我宿せばし破れ蚊や

筆柳風ソラ孤松芭蕉風流

新庄

自鹿も鳴なる奥の原 羽織に包む茸狩の月 秋更て捨子にかさん菅の笠 うたひすませるみのゝ谷ぐみ 乗放牛を尋る夕間夕 出城の裾に見ゆるかどり火	奉る供御の着も疎にて よこれて寒き彌宜の白張 ほりほりし石のかろとの崩けり 知らざる山に雨のつれづれ 咲かゝる花を左に袖敷て 鶯かたり胡蝶まふ宿	風流亭（渋谷甚兵衛） 水の奥氷室尋る柳哉 ひるがほかゝる橋のふせぎ風流 風渡る的の變矢に鳩鳴て	盛信亭（渋谷九郎兵衛） 風の香も南に近し最上川 小家の軒を洗ふ夕立（息）柳 物もなく麓は霧に埋て木
端 風 翁 柳 流 端	翁 流 風 柳 端 良	翁 風 流 ソウ	翁 柳 風 端

08「有難や」の巻

元禄二年六月四日、羽黒山本坊におみて八人歌仙を興行。



「靈地に妙香あり」という。南谷別院は羽黒山の靈気が漲っていて雪溪を渡る風が良い香りを運んできてくれることだ。6月2日羽黒山本坊において露丸・釣雪・珠妙・梨水・円入・會覚・曾良を入れて八人歌仙を巻いた。その発句がこの句。會覚や土地の人々への挨拶吟。



有難や雪をかほらす風の音	芭蕉
住程人のむすぶ夏草	露丸
川船のつなに蛭を引立て	曾良
鶉の飛跡に見ゆる三ヶ月	釣雪
澄水に天の浮べる秋の風	珠妙
北も南も礎打けり	梨水

南谷跡 山形県鶴岡市

まず興行の前日の三日から見てみよう。曾良の「随行日記」の六月三日のところにはこうある。

新庄を発った芭蕉と曾良が羽黒山の門前の羽黒手向荒町の近藤左吉（露丸）宅に着いたのは申の刻、今でいうと四時過ぎで「本坊ヨリ帰りテ会ス。」というのは露丸が本坊から戻るのを待ったという意味か。露丸に会い、新庄の大石田平右衛門の紹介状を露丸に預け、羽黒山の若王寺宝前院へ行き、別当執行代和交院（會覚）にそれを渡してもらおう。ふたたび露丸が戻ってから、南谷の別院紫苑寺に行く。そこが會覚（本坊）の隠居所で、途中祓川の辺で暗くなったというから、午後七時くらいだったのだろう。この日からしばらくこの南谷の別院紫苑寺に泊まることになる。残念ながら若王寺宝前院の大伽藍も別院紫苑寺も今はない。明治元年の神仏分離令で、羽黒山は出羽神社になり、明治五年には修験道が禁止され、見る影もなくなった。

そして曾良の「随行日記」の六月四日のところにはこうある。

四日は良い天気恵まれたが、その分暑かっただろう。蝉の鳴く中を蕎麦切りを食べに若王寺宝前院の本坊へ行き羽黒山別当の會覚阿闍梨に会う。この人はのちに、別れの時に、

忘なよ虹に蝉鳴山の雪 會覚

の発句を送ることになる。蕎麦切りは今日のように細く切ったそばで、それ以前の蕎麦掻に対して言う。

曾良の「俳諧書留」の前書きに、「羽黒山本坊におみて興行、元禄二、六月四日」

とあるように、この日の興行は南谷ではなく羽黒山の本坊の方で行われた。俳諧はここでまず表六句ができあがることになる。そしてこの日は「俳、表計ニテ帰ル」とあるように、本坊で行われた後、南谷の別院紫苑寺に帰っている。

この発句は後に、

有難や雪をかほらす南谷 芭蕉

に改作され、「奥の細道」に収められている。

09「めづらしや」の巻

元禄二年六月十日、長山重行邸にて芭蕉、曾良、重行、露丸による四吟歌仙興行。



芭蕉が羽黒の露丸と共に鶴岡に下り、長山重行邸に宿を取った際に供されたのが民田茄子であったとも言われている。鶴岡市民田五百川の宝昌院の境内にも「めづらしや」の句碑がある。

「おくのほそ道」(出羽三山) 元禄2年6月10日、「出羽三山」参詣を終え「鶴岡」に出て鶴岡藩士「長山重行邸」へ。ご馳走になった珍しい長茄子を褒めることで挨拶吟とした。



めづらしや山をいで羽の初茄子	芭蕉
蝉に車の音添る井戸	重行
絹機の暮閑しう梭打て	曾良
閨弥生もす糸の三ヶ月	露丸
吾顔に散かかりたる梨の花	重行
銘を胡蝶と付しさかつき	芭蕉

長山重行邸跡 山形県鶴岡市

曾良の「随行日記」の六月十日の所にはこうある。

午前中に飯道寺正行坊がやってきて会ったとあるが、どういう人かはよくわからない。ただ、江州(近江国)飯道寺というと、四日の所に江州円入とあったから、円入の知り合いなのだろう。昼前に本坊に行って、また蕎麦切を食べる。茶はともかく、お寺で昼から酒飲んでたのか。二時ごろまで盛り上がったのだろう。

これがお別れ会になったのか、芭蕉と曾良は鶴岡に向かう。本坊を出て円入は道に出る所まで送ってゆく。「大杉根」はよくわからないが爺杉のことか。祓川で手を洗い清め若王寺宝前院を出てゆく。手向の左吉(露丸)の家から芭蕉さんだけが馬に乗り、「光堂」まで釣雪が送っていく。もちろん中尊寺ではなく、手向の正善院前の黄金堂だという。そこから芭蕉と曾良と露丸は鶴岡に向かう。

夕方近く鶴岡の長山五良右衛門宅に到着する。お粥を食べて一休みし、夜になってから興行を行う。長山五良右衛門は「奥の細道」本文には「長山氏重行」とある。

この時の発句が、

めづらしや山をいで羽の初茄子 芭蕉

「山を出で」に「出羽」を掛けて、出羽三山を下りてここ鶴岡で初めて取れた茄子をご馳走になってめづらしや、となる。ういう掛詞を使った技巧的な句は、貞門時代と蕉風確立期の古典回帰の時期に特徴的にみられる。

10「温海山や」の巻

元禄二年六月、出羽酒田 伊東玄順亭にて、芭蕉・曾良・不玉の三吟歌仙。



酒田で芭蕉は、不玉(伊東玄順)という医者邸宅に逗留。「象瀧から酒田に戻る帰路」での作。酒田に戻り門人達への挨拶吟。

談林のスピード感と対照的なのが、蕉風確立期の蕉門で、特に「奥の細道」の旅の途中の曾良の日記なんかを見ると、興行は遅々として進まず、歌仙一巻に二日三日かかってたりする。この「温海山や」の巻はその三日かかったという歌仙で、メンバーは芭蕉、曾良、そして酒田の不玉の三人、三吟歌仙だ。「羽黒を立て鶴が岡の城下、長山氏重行と云物の心の家にむかへられて、誹諧一巻有。左吉も共に送りぬ。川舟に乗て酒田の湊に下る。淵庵不玉と云医師の許を宿とす。

あつみ山や吹浦かけて夕すみ

暑き日を海にいれたり最上川



塩俵岩 山形県鶴岡市

温海山や吹浦かけて夕涼  
みるかる磯にたたむ帆筵  
月出ば関やをからん酒持て  
土もの竈の煙る秋風  
しるして堀にやりたる色柏  
あられの玉を振ふ蓑の毛

芭蕉  
不玉  
曾良  
芭蕉  
不玉  
曾良

### 11「忘るなよ」の巻

元禄二年、羽黒より被贈 「忘るなよ」付合（會覚・芭蕉・不玉・曾良）



羽黒より被贈  
忘るなよ虹に蝉鳴山の雪  
杉の茂りをかへり三ヶ月  
磯傳ひ手束の弓を堤て  
汐に絶たる馬の足跡

會覚  
芭蕉  
不玉  
曾良

六月十三日芭蕉が鶴岡出立に際し、羽黒の會覚から飛脚便で贈られた餞別の発句によって、酒田滞在中につづけた四句であったことが知られる。會覚阿闍梨は羽黒山別当代理、「有難や」の巻八人歌仙（二裏「盃のさかになに流す花の浪」會覚）に有り。



忘るなよ虹に蝉鳴山の雪  
杉のしげみをかへりみか月  
弦かくる弓筈を膝に押当て  
まへ振とれば能似合たり  
ばらばらに食くふ家のむつかしく  
漏もしどろに晴るる村さめ

會覚  
芭蕉  
不玉  
不白  
釣雪  
主筆

羽黒山御本坊平 山形県鶴岡市

### 12「文月や」の巻

元禄二年、直江津、古川屋市左衛門（直江津）「文月や」の歌仙興行。左栗・此竹・布囊・眠鷗等今町の俳人。



7月6日 雨上がる。昼に直江津へ到着。聴信寺に予め書状をやっておいたのに忌中と  
いっていい顔をしない。取って返すと、石井善次郎が追ってきたが戻らずにいた。再三再  
四呼びに来るし、雨は強くなるので一旦戻る。宿は、古川市左衛門宅にする。夜、「文月  
や六日も常の夜には似ず」を発句に句会。

明日は七夕。天の川では二つの星が一年に一度の逢瀬を楽しむ。今夜はその前夜だがすでにして常の夜とは違った雰  
囲気を感じる。7月6日、新潟県直江津での作。



文月や六日も常の夜には似ず  
露をのせたる桐の一葉  
朝霧に食焼烟立分て  
蛸の小舟をはせ上る磯  
鳥啼むかふに山を見ざりけり  
松の木間より続く供やり

芭蕉  
左栗  
曾良  
眠鷗  
此竹  
布囊

琴平神社 新潟県上越市

13「星今宵」の巻

元禄二年七月七日、直江津、佐藤元仙宅（右雪）で「星今宵」歌仙興行。



星今宵師に駒引いて留たし	右雪	秋風送る父が旅立	芭蕉
色香ばしき初刈の米	曾良	かの巻を錦に包拾ふべし	雪
さらし水踊に急ぐ布つきて	芭蕉	絶て継たる国の古堂	右
此間十句キレテシレス		種植て小枝に花の名を印	也
初裏に続く→		雨のあがりの日は長閑也	曾良

七月七日の曾良の「随行日記」に、「雨不止故、見合中ニ、聴信寺へ被招。再三辞ス。強招クニ及暮。 昼、少之内、雨止。其夜、佐藤元仙へ招テ俳有テ、宿。夜中、風雨甚。」とある。この日の「俳」と思われる。

前日、聴信寺が忌中で行けなかったこともあって、七日になって今度は再三にわたってくるように言われる。雨が降っているうえに芭蕉の体調もすぐれなかったのだろう。夜になって佐藤元仙（右雪）亭で興行が行われる。ただ、曾良の「俳諧書留」には表三句しか記されていない。しかも「文月や」の巻あとに「同所」と書かれている。

そう思ってあらためて曾良の前日の「随行日記」を見ると、「聴信寺へ弼三状届。忌中ノ由ニテ強テ不止、出。石井善次良聞テ人ヲ走ス。不帰。及再三、折節雨降出ル故、幸ト帰ル。宿、古川市左衛門方ヲ云付ル。夜二至テ、各来ル。発句有。」とあり、「発句有」とあるだけで「俳有」ではない。

つまり前日は「文月や」の発句を作っただけで、実際の興行は七日の夜に行われたのではなかったか。そうなると、この同じ日に「文月や」の巻二十二句を巻き、途中で終わってしまったあとに果してこの「星今宵」の興行が行われたのかどうか……

14「残暑暫」の巻

元禄二年七月二十日、金沢、犀川のほとり「ある草庵」に招かれての句会。（松玄庵閉会即興）。



羽黒より被贈	
忘るなよ虹に蝉鳴山の雪	會覚
杉の茂りをかへり三ヶ月	芭蕉
礮傳ひ手束の弓を堤て	不玉
汐に絶たる馬の足跡	曾良

元禄2年7月15-23日、「松玄庵」（斎藤一泉）に招かれて出された料理に感謝を込めて詠んだ即興の句。成案は「秋涼し手毎にむけや瓜茄子」



残暑暫手毎にれうれ瓜茄子	芭蕉
みじかさまたで秋の日の影	一泉
月よりも行野の末に馬次て	左任
透間きびしき村の生垣	ノ松
鍬鍛冶の門をならべて槌の音	竹意
小桶の清水むすぶ明くれ	語子

長久寺 石川県金沢市

天気は良かったが残暑厳しい頃だ。一泉は金沢の人で犀川の畔に松玄庵を構えていたという。暑い中を一折、つまり初の懐紙の表裏のみを巻いた。半歌仙とはいえ、芭蕉を含め十三人、北枝、乙州等も参加したにぎやかな興行だった。夕方には野畑を散歩し、夜食を食べてから解散したが、子の刻というから真夜中だった。

この句は「奥の細道」では、

ある草庵にいざなはれ

秋涼し手毎にむけや瓜茄子 芭蕉

に改められている。

15 「しほらしき」の巻

元禄二年七月二十五日、「奥の細道」の途中、小松の鼓蟾の館で催された「山王句会」。



本折日吉神社の神官で俳人の藤村伊豆守章重、俳号鼓蟾の館に一泊。同夜、芭蕉はじめ曾良、北枝、歎生、塵生ら十人が、有名な山王句会を催す。

「曾良随行日記」には、「廿五日快晴。欲小松立、所衆聞テ以北枝留。立松寺へ移ル。多田八幡へ詣テテ、真（実）盛が甲冑・木曾願書ヲ拜。終テ山王神主藤井（村）伊豆宅へ行。①有会。終テ此二宿。申ノ刻ヨリ雨降り、夕方止。夜中、折々降ル。」とある。このあと山王神主藤井（村）伊豆宅へ行き、②有会とある。「おくのほそ道」では、①②が逆になっている。本歌仙は②、①はこの後に記述する「ぬれて行くや」の巻である。



建聖寺 石川県小松市

しほらしき名や小松ふく萩芒	芭蕉
露を見しりて影うつす月	鼓蟾
躍のおとさびしき秋の数ならん	北枝
葎のあみ戸をとほぬゆふぐれ	斧ト
しら雪やあしだながらもまだ深	塵生
あらしに乘し鳥一むれ	志格
浪あらし磯にあげたる矢を拾	夕市
雨に洲崎の岳をうしなふ	致益

16 「ぬれて行や」の巻

元禄二年七月二十六日、「奥の細道」の途中、小松の歎生邸での五十韻興行。



小松天満宮の南側を流れる梯川に架かる大川大橋南詰に芭蕉句碑「ぬれてゆく」がある。この付近に越前屋歎生邸（葎島神社の前通りの角家で句碑の斜め向かい）があった。これより 260m 川下の来生寺付近に北枝句碑がある。

庚申の夜には人の体の中にある三尸の虫が寝ている間に抜け出し天帝にその人間の罪を報告するという。それを防ぐために大勢で集まり談笑しながら夜を徹する。これを庚申待という。この五十韻興行も、庚申待ということで夜を徹して行われたのであろう。「おかしき」は古語で用いられる「面白い、趣がある」との意味。雨の中で濡れていても、周りに萩の花が咲いていれば楽しい気分になる。この日は昼間は激しい雨が降り夕方には止んだが、昼間の雨を引き合いに出して雨の中をたくさんの人が集まり、さながら萩の原を行くようです。という挨拶の意味が込められている。



小舞子児童公園 石川県白山市

ぬれて行や人もおかしき雨の萩	芭蕉
すすき隠に薄葎家	亨子
月見とて猫にも出ず船あげて	曾良
干ぬかたびらを待かぬるなり	北枝
松の風昼寝の夢のかいさめぬ	二蟾
轡ならべて馬のひと連	志格
日を経たる湯本の峯も幽なる	斧ト
下戸にもたせておもき酒樽	塵生



元禄 2 年 7 月 26 日、小松歎水亭の句会  
曾良俳譜書留 廿六日歎水亭会 雨中也。  
ぬれて行や人もおかしき雨の萩 翁  
心せよ下駄のひゞきも萩露 ソラ  
かまきりや引きこぼしたる萩露 北枝

来生寺（小松市園町チ 5）駐車場脇梯川梯大橋土手に立花北枝の句碑がある。  
かまきりや引きこぼしたる萩の露  
北枝は研屋小路（小松市大川町 3-75 松任町北信号付近）で生まれている。

17「馬かりて」の巻

元禄二年八月四日、「奥の細道」の途中「山中」、「馬かりて」はその前夜、北枝から曾良への餞別句だった。



芭蕉の館 石川県加賀市

元禄二年八月四日、「奥の細道」の旅の途中、加賀の山中温泉での芭蕉、曾良、北枝による三吟興行。翌日、体調不良のため曾良が芭蕉と別れ、先に伊勢に向かうことになっていて、そのための送別の意味で行われた興行と思われる。この歌仙については、芭蕉の指導の内容を北枝がメモした「山中三吟評語」が残されている。「曾良餞翁直しの一巻」とも呼ばれている。

馬かりて燕追行別れかな 北枝  
 「馬かりて」は「馬駆りて」で、秋にツバメが南の島へ帰ってゆくのを馬を駆り立ててでも追いかけていくような別れという意味。「奥の細道」の旅の途中、北陸の山中温泉に滞在中、曾良が病気になる、伊勢長島のかかりつけの医者のところへと急遽帰ることとなった時の句だ。この歌仙で曾良の句が途中までしかないのも体調が悪く途中で退席したと思われる。この翌日、曾良は、

跡あらん倒れ臥すとも花野哉 曾良  
 の句を詠み、これに芭蕉は、  
 さびしげに書付消さん笠の露 芭蕉  
 と答えたと「芭蕉翁略伝」にある。

馬かりて燕追行別れかな 北枝  
 花野みだる山のまがりめ 曾良  
 月よしと角力に袴踏ぬぎて 芭蕉  
 鞞ばしりしをやがてとめけり 北枝  
 青淵に瀬の飛こむ水の音 曾良  
 柴かりこかず峰のささ道 芭蕉

たとえ途中で倒れても、芭蕉さんが後から同じ道に来てくれると思うととても頼もしい、まるで花野を旅するかのようです、という曾良の句に、笠に書いた「乾坤無住同行二人」という書付を涙の露で消すのは寂しい限りです、と芭蕉が答えている。この二句は、「奥の細道」では推敲され、

ゆきゆきて倒れ臥すとも萩の原 曾良  
 今日よりや書付消さん笠の露 芭蕉  
 と改められている。

18「あなむさんやな」の巻

元禄二年八月五日、「奥の細道」の途中「小松」に再び三吟歌仙を興行。

山中温泉で曾良と別れた芭蕉はふたたび小松に戻り、以前に実盛の甲のところで詠んだ発句で、鼓蟾、亭子との三吟興行を行う。

五日

朝曇。昼時分、翁・北枝、那谷（那谷寺）へ趣。明日、於二小松（小松）二一、生駒万子（俳諧師）為出会也。従順シテ帰テ、良（即）刻。立。大正侍（大聖寺）二趣。全昌寺（全昌寺）へ申刻着。宿。夜中、雨降ル。

あなむさんやな胃の下のきりぎりす 芭蕉  
 ちからも枯し霜の秋草 亭子  
 渡し守綱よる丘の月かげに 鼓蟾  
 しばし住べき屋しき見立る 芭蕉  
 洒肴片手に雪の傘さして 亭子  
 ひそかにひらく大年の梅 鼓蟾



あなむさん甲の下のきりぎりす



芭蕉



むさんやな甲の下のきりぎりす 芭蕉  
 幾秋か甲にきえぬ鬢の霜 曾良  
 くさずりのうら珍しや秋の風 北枝



芭蕉  
 曾良  
 北枝

多太神社 石川県小松市